

倉橋由美子明治大学特別功労賞

その次第とこれから

飯澤 文夫*

倉橋由美子さん¹は、文学部4年の1960年1月、「パルタイ」で明治大学学長賞²を受賞した。そして早くも同じ年の8月、最初の作品集『パルタイ』を文藝春秋新社から刊行している。その後記に、小説に取り組む姿勢を、次のように記した。

《パルタイ》以後、わたしはわたしの作品とともに読者のまえにひきだされ、小説という形式でみずからを縛ることになりました。これは、一方では小説という形式の可能性を探求する仕事を自分に課すことでもあ



* いいざわ・ふみお／図書館事務部図書館庶務課長

¹ 1935年高知県香美郡土佐山田町（現・香美市）生まれ。1956年本学文学部文学科仏文学専攻に入学。多くの年譜や辞典で「仏文科」あるいは「フランス文学科」としているのは誤り。1960年大学院文学研究科に進学、1962年退学。

² 第4回。明治大学新聞主催。前年の第3回では、「雑人撲滅週間」が、学長賞入選作なしの佳作第二席。

ります。そこでわたしにとって、小説を書くことは同時に小説の方法を考え、反省することであり、またなによりもそのことがわたくしを小説へとかりたてているようにおもわれます。わたしはさまざまな形式を組み立てては破壊するはてしない作業に憑かれていて、一見むなしいこの冒険に唯一の生きるよろこびをみいだします。

「パルタイ」は、選者の平野謙³が絶賛したこともあり、雑誌「文學界」（3月号）と「文藝春秋」（9月号）に相次いで転載され、冒頭の単行書となった。さらに、同年上半期の第43回芥川賞候補となり、北杜夫の『夜と霧の隅で』と競り合った。鮮烈なデビューであった。

上掲の文章からは、昂揚した気持ちと強い意志が伝わってくる。本物の想像力によって「文学的真実」を構築することが、あるべき小説の姿である。この厳しい小説観は、後に鋭い舌鋒で書かれた、小説論ノート『あたりまえのこと』⁴によく表されている。倉橋さんは終生この志を貫き通し、小説のみならず、エッセイ、評論、書評、翻訳の分野で旺盛な執筆活動を続けた。著書は海外での出版も含めて130冊に及んだ。

ところが、2005年6月10日、前日に『新訳 星の王子さま』（宝島社）の「訳者あとがき」を書き上げて、編集者との打合せを済ませ、印刷に回す段取りをつけて寝ついた未明に、拡張型心筋症で急逝されてしまった。69歳であった。

倉橋さんの訃報が一斉に報じられた直後、図書館長の前道生先生から、倉橋文学の顕彰をしたいとお話しがあった。何を措いても明治大学で真っ先にすべきことであり、ついでに明治大学特別功労賞に推薦したい。いつもながらの静かな口調ではあったが、強い思いと力を感じた。

明治大学特別功労賞

同賞は、本学の学生、教職員、校友等であって、学術、文化、スポーツその他の分野において顕著な功績を挙げ、それにより本学の教育・研究の振興・発展に貢献したと認められる個人又は団体に贈呈することを目的に、

³ 文芸評論家。当時は明治大学文学部専任講師、後に教授。

⁴ 1977年から79年にかけて雑誌「波」に連載。単行本は、朝日新聞社、2001。「朝日文庫」（朝日新聞社、2005）

1992年に制定された。本学役員及び教職員2名が、学長又は理事長に推薦し、理事会において決定するものとしている⁵。制定以来、2005年の映画監督岡本喜八氏まで、24名の方に贈呈している

原先生は、共同推薦を、元文学部長で理事の渡辺隆喜先生と現文学部長の吉村武彦先生に持ちかけ、顕彰のあり方を、平野謙の薫陶を受けた元文学部教授の中山和子先生に相談された。また、倉橋さんと親交の深かった政治経済学部の小副川明先生（近代フランス詩）を通じて、御主人の熊谷富裕さんに連絡をとられるなど、精力的に動かれた。

それらの方々の内諾をいただき、一周忌に当る2006年6月を目処に、展示会や講演会などを含む記念事業を実現させるべく、関係方面に働きかけていくことになった。

中山先生から、倉橋さんが仕事場とされた伊豆の家が素晴らしいので、展示会で写真パネルにしてはどうかとの勧めがあった。御主人が住まわれていることもあり、年が改まった1月24日、中山先生にも同行いただき、館長と挨拶に伺った。

修善寺駅から車で10分ほど登った急な西斜面にその家はあった。「これまでの家族との一緒にのリズムから離れた、自分だけの新たな創作の場と、その場がそのまま自分の墓場になるような空間」⁶をとの希望により、大学院生であった二女の熊谷さやかさん（現一級建築士）が設計し、1996年に竣工したものだそうだ。外壁は全面板張りで、緩やかに弧を描き、巻くようなスロープで導かれる2階にせり出した突端は浴室で、西伊豆の山並み越しに壮麗な富士と対峙していた。土手には、仏手柑、姫沙羅、山茶花、猫柳などが植えられていた。熊谷さんからは、倉橋さんの日常や人となり、アメリカ留學生活、交友関係などのお話を伺うことができた。

館長が起草した推薦理由書は、次のように記された。倉橋さんの半世紀にわたる多彩かつ豊饒な文学活動は、学部在学中における学長賞の受賞を出発点にしている。知的な作風、すなわち、反リアリズムの立場から奔放な想像力を駆使しつつ、虚構の世界を自在に描き出す固有の魅力的方法が、

⁵ 明治大学特別功労賞要綱（1992年6月15日制定）

⁶ 「新建築住宅特集」124（1996.8）

現代日本文学に大きな刺激を与えた。水準の高い膨大な作品を創作した業績は、本学の榮譽を高めるのに大きな貢献を果す貴重な功績である。

渡辺、吉村両先生との連名で提出された推薦は、3月15日の理事会で承認された。

贈呈式は6月16日と決まり、森宮康教務担当常勤理事を総合統括委員長とする実行委員会が結成された。その元に、運営実行PGを置き、委員長に館長、副委員長に渡辺先生と吉村先生、委員として長岡功広報部長、山崎誠学生事務部長、永代達三総務部庶務課長、高山茂樹教務課長、米山志郎文学部事務長、浮塚利夫総合サービス課長、そして私が当ることになった。事務局は図書館庶務課に任された。

第1回のPGを開いたのは、予定日まで2ヶ月足らずに迫った4月24日であった。全体企画を図書館と文学部、図書館展示を図書館、式典を総務部庶務課、講演会と当日運営を文学部と教務課、広報宣伝を広報部と学生部が分担することとした⁷。それぞれに大車輪の準備が開始された。

PGには、30年に亘って倉橋さんと親交を結び、蔵書や遺品の整理に当っておられる、千葉市役所の積田正弘さん⁸に加わっていただくことにした。積田さんには、展示会に関してのアドバイスや、御自身が所蔵される貴重な関係資料多数を貸与していただいた。

ポスター、チラシの作成とプレスリリースは広報部が担当した。キャッチコピーの「築かれた文学的知性・倉橋由美子の『創造感覚』と『世界観』」は、江津さんの創案である。端的ないい表現である。マスコミ関係では、「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「信濃毎日新聞」「高知新聞」、共同通信社、雑誌「文学界」「日本古書通信」「活字倶楽部」などに上げられた。「朝日新聞」高知全県版には、高知県立文学館学芸員の津田加須子さんが、図書館での展示風景写真を交え、「土佐カルチャー人物伝 倉橋由美子さん」⁹を4回に亘って連載された。

⁷ 前田浩さん（総務部庶務課）、江津英昭さん（広報部）、桑原理恵さん（教務課）、小林宣子さん（文学部事務室）、小嶋信貴さん（学生課）が担当した。式典当日は、当該部署からさらに大勢の応援をいただいた。

⁸ 倉橋さんは長く伊勢原市に住み、近くにあった東海大学の学生たちと親しくされた。積田さんはその幹事役で、「交歓の会」と称し、誕生会や毎年の旅行など、亡くなるまで親密な交流を続けた。

⁹ 2006年6月10日、17日、24日、7月1日、朝刊。

このほか、大学及び図書館ホームページのお知らせ記事に、たくさんのリンクが張られ、それによる問い合わせが少なくなかった。また、図書館に出入りの書店さんや、大学周辺の新刊書店、古書店がポスター掲示やチラシ配布に、心よく応じてくれた。

在学生や教職員のみならず、広く大学関係者に理解いただくために、明治大学連合父母会、明治大学校友会、連合駿台会に後援を要請した。いずれも快諾され、多額の賛助金と各組織を通じた PR をいただいた。

贈呈式、記念講演会

2006 年 6 月 16 日、朝からの雨模様で心配されたが、昼には上がった。

会場のリバティホールは、開式 1 時間前の午後 1 時に開場した。ホールは倉橋ファン、本学学生、校友ら約 400 名の聴衆で埋まった。文学部学生が多かったのは嬉しいことであった。開式までの時間、グレン・グールド演奏のバッハ『ゴールドベルク変奏曲』の調べに乗せて、倉橋さんの生涯と図書館での特別展の様子をパワーポイントのスライドで投影した。

式典に先立って、23 階の貴賓室でご遺族及び記念講演者と、長吉泉理事長、納谷廣美学長をはじめとする大学関係者との顔合わせがあり、記念撮影の後、ホールに移った。

式典は、第 1 部・贈呈式、第 2 部・記念講演の二部構成で行われた。総



合司会を図書館庶務課の高橋美子が務め、贈呈式の進行を坂本恒夫教務部長、記念講演の進行は館長が行った。開式に先立って、全員で倉橋さんの遺影に黙祷を捧げた。

贈呈式では、まず森宮康教務担当常勤理事が特別功労賞の趣旨を説明した。続いて、理事長が、著作権継承者であるさやかさんに、賞状と記念のメダルを贈り、倉橋さんの功績を讃えた。

引き続き、学長の祝辞があった。土佐は自由民権の生まれた地であり、太平洋を臨んで世界にはばたいた人物を多く輩出した。倉橋さんにもそのルーツがある。権利自由、独立自治を理念とする明大と呼応し、倉橋さんの志に繋がるものである。倉橋文学はこの土壌の中で生まれたものだと思うと述べた。

最後に、さやかさんが、「皆さんの生活の中で母の作品を手にとってもらえたら嬉しく思います」と挨拶され、亡くなる前年に、リバティ・アカデミーの公開講座に受講申込をし、さやかさん共々校舎の下見までして心待ちにしていたが、講座が不成立で出席できなかったことを明かされると、会場がざわめいた。日本近代詩をテーマとする講座であったが、受講者が一定人数に達しなかったために、キャンセルになったのである。偶然にも、当時私はリバティ・アカデミーを担当していた。倉橋さんの申込に気づかず、かつまた、講座を開講できなかったことは慙愧に堪えない。

記念講演は、中山先生と作家の加賀乙彦先生にお願いした。中山先生は、『『パルタイ』を巡って』と題して、平野謙の最初の評価と、倉橋さんの明晰さに裏づけられた批判精神を日本文学史の流れの中で説かれた。加賀先生は、「倉橋由美子の文学」で、60年安保の時代状況、文体の魅力やスケール感、自らの交流のエピソードなどを、ユーモアを交え語られた¹⁰。お二人とも、大変に感銘深い講演で、終了後、多くの感動の声が寄せられた。

式典終了後、会場を23階の「サロン紫紺」に移して、ご遺族、大学役職者、友人、近親者により懇親会が開かれた。玉井崇夫文学部教授の進行で、吉村先生の音頭で乾杯の後、後援いただいた石橋良一連合父母会会長、大

¹⁰ これらの模様は、大学ホームページ「TOPICS&NEWS」2006年6月20日に会場風景とともに紹介されている。<http://www.meiji.ac.jp/koho/topics/news/topics060620.html>

淵宏校友会副会長、日高憲三連合駿台会副会長からご挨拶、熊谷冨裕さんから長女出口まどかさんらご遺族の紹介、翻訳家の古屋美登里さん¹¹、積田さん、宝島社出版部長の富永虔一郎さん、小副川先生から心温まるスピーチをいただいた。ささやかではあったが、和やかな懇親会であった。

倉橋由美子展

特別展は、式典に先行して6月5日から7月6日の会期で、中央図書館ギャラリーを会場に開催された展示は、図書館のギャラリー企画運営WG¹²が当り、倉橋さんの作家業績の全容を表現することを目指した。

展示資料を確定するための最初の書誌・所蔵調査を、吉田千草、久松薫子（以上、図書館庶務課）、鈴木秀子（総合サービス課）が行った。著書（単行書）は、前述のとおり、作品、翻訳書、海外出版を併せて、130冊に及んだ。この数は、私たちの想像をはるかに超えるものであった。そのうち、図書館に所蔵するものは、『倉橋由美子全作品』全8巻¹³や文庫本などで、明大文庫¹⁴と和泉図書館を中心に30冊余に過ぎなかった。残りは、急遽、新刊書店、古書店に発注した。古書は、地の利を生かして神保町の古書店街で多くを入手したが、国内外の古書ネットが大きな威力を発揮した。

この調査で、海外での翻訳出版や、アメリカの大学に提出された学位論文が多数あることが分かった。翻訳は、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語、ポルトガル語、ノルウェー語、セルボ・クロアチア語、スウェーデン語に亘り、27冊に及んだ。学位論文も、カリフォルニア大学バークレー校などで5点が確認された。可能な限り収集に努めたが、翻訳書は

¹¹ 高校生の時に倉橋さんにファンレターを出し、大学1年生の時に初めて会って以来、30年余の付き合いをされている。倉橋さんの最もよく理解者であり、倉橋文学の広報担当を自認して、雑誌「活字倶楽部」の倉橋特集、ジュンク堂池袋店でのトークショー（いずれも2006年7月）などを企画。翻訳書に、エドワード・ケアリー『望楼館追想』（文春文庫、2004）、著書に『女優オードリー・ヘップバーン』（理論社、2002）など。2007年度から本学商学部兼任講師に予定。

¹² 委員長・浮塚利夫（総合サービス課長）、福田留理子（図書館庶務課）、金澤敦子、宮澤順子（以上、整理課）、鈴木秀子、平田さくら、矢野恵子（以上、総合サービス課）

¹³ 新潮社、1975-1976。

¹⁴ 中央図書館に設置された明大関係のメモリアルコレクション。教職員、校友、学生、大学各部署の刊行物、学位論文、学内刊行物など、本学に関わる図書、資料を網羅的に収集・保存している。

購入できたものが4冊にとどまった。他は熊谷さんからの紹介で日本著作権輸出センター（代表取締役栗田明子さん）から10冊、積田さんから1冊を借用した。学位論文は、オンデマンドで3冊を購入、他の2冊は、テキサス大学とサンディエゴ大学両図書館から取寄せた。

会期中に、大阪外語大学大学院のイタリア人留学生ルチアーナ・カルディさんが訪ねて来られた。7月のアメリカ日本文学会で、倉橋さんをテーマにした発表¹⁵が日米2人の研究者からあったことを伺い、後日レジュメをいただいた。カルディさん自身も倉橋さんをテーマに研究を続けているとのことで、後述する、秋の和泉図書館での講演会にも参加された。

海外での関心の高さは、驚きであると同時に、頷けることでもあった。「パルタイ」には、「明晰」という言葉が非常に印象的に使われている。「明晰」は、倉橋さんそのものである。明晰さこそが、日本の小説になかったものではなかろうか。冒頭の文章に出会った時にふと感じたことがある。それは、倉橋さんが追求した小説の「形式」や明晰さは、情緒的な文学に馴染んだ日本人の感覚には、受入れきれないのではないかということである。海外での評価を知り、その感を一層強くした。

展示品は最終的に、著書77冊、翻訳書22冊、海外出版物15冊、図書・雑誌収録著作68点、学位論文5冊、研究・評論等14点、ご遺族からお借りした泉鏡花文学賞などの表彰状、高校時代の秀才少女振りを窺わせる生真面目に執られた授業ノート、自筆原稿、写真、交歓の会が贈ったガラス製のペーパーウエイトなどの遺品類25点、合せて226点になった。著書、翻訳書はほぼ網羅できたものと思う。他は、スペースの許す限りとなった。「パルタイ」初出の「明治大学新聞」（1960年1月14日）は、全紙判の原本を見開きで展示し、その迫力で観覧者の関心を呼んだ。

また、新潮社（出版部水藤節子さん）、講談社（文芸図書第一出版部高柳淑郎さん）、宝島社（出版部長富永さん）、共同通信社（編集委員・論説委員小山鉄郎さん）から、写真の借用や資料の提供を受けた。

さやかさん、積田さん、古屋さんには事前にご足労願ってチェックをしていただいた。さやかさんは何度も足を運んでくださった。清楚なお花も

¹⁵ 第15回。7月1～2日、於城西国際大学東京紀尾井町キャンパス。

いただいた。「この空間で母と会っていた」と言っていたのは何より嬉しいことであつた。

裏話を二、三披露したい。

『新訳 星の王子さま』（宝島社



文庫）と『老人のための残酷童話』（講談社文庫本）は、ちょうど会期中に刊行が予定されていて、オープンには間に合わなかった。『新訳 星の王子さま』は富永さんの計らいで見本刷をお借りし、『老人のための残酷童話』は、講談社文庫担当の高垣さんのアイデアで校正刷のジャケットを、他の本に被せて展示したものである。

会場に密やかに一輪挿しが置かれていたことに気づかれたであろうか。積田さんの手製で、倉橋さんへの熱い思いがこめられたものである。当課員が、絶やさず季節の花を挿しつづけたことも記しておきたい。

一人でも多くの在学生に読んで欲しいとの願いから、三省堂書店明大駿河台店に、会期中から10月まで、倉橋コーナーを設置してもらった。川崎店長が作成されたカラー刷りチラシを、展示会場に置くとともに、文学部の授業で配布していただいた。

その後、そしてこれから

一連の行事も全て終了し、大学が夏期休暇に入ったある日、館長宛に一通の手紙が届いた。社会保険労務士をされているという、年配の校友らしき方からであった。式典に参加したが、「大変に素晴らしい会でした」と書き出されていた。倉橋さんのことも「パルタイ」も全く知らなかったという。図書館をよく利用していて、特別功労賞のポスターを見た。受賞された倉橋さんという方が講演をされるのだと思い、参加する気になった。お嬢さんのさやかさんを見て、写真の倉橋さんとそっくりで、さぞかし美しい方

であったろうと思った。早速、翌日市の図書館に行き、『バルタイ』¹⁶とエッセイ集『わたしのなかのかれへ』¹⁷を借りて読んだ。『バルタイ』はむづかしかったが、エッセイ集は面白かった。小野小町は倉橋さんのような女性であったのではないかと思った。倉橋さんのような人を生んだ明治大学は立派な大学であると思った。という。楽しく嬉しい便りであった。

私事になるが、式典には20代半ばになる私の愚息も出席した。本学の卒業生ではないが、大学でフランス文学を専攻した。しかし、前述の方と同様に、倉橋さんの作品は読んだことはなかったという。それが、記念講演を聴き、展示を観て感激し、帰りに4冊も買い込んできた。思わぬ身近に一人の読者を獲得したのは、大いなる喜びであった。

特別功労賞は、単に倉橋さんの業績を偲び、感謝するだけのパフォーマンスではない。むしろ、未来に拓けていくための機会であると、館長は考えられたに違いない。私たちも同じ思いである。最後に、特別功労賞のその後と、少し先のことについて記しておきたい。

昨年11月2日、和泉図書館講演会「著者と語る」¹⁸は、「対談 倉橋由美子大人の小説の魅力ー豊崎由美が『お子ちゃま』文学を斬る!」をテーマに、古屋さんとライターの豊崎由美さんに語っていただいた。学園祭に合わせたことで、やや学生の入りが悪かったのは残念であったが、お二人の縦横なトークに、会場は沸き、質問も活発で、楽しい時間であった。熊谷さん、さやかさん、積田さんも出席してくださった。この模様は「図書館の譜」の本号でお読みいただきたい。講演会から暫くの間、和泉図書館で著書などのミニ展示を行った。

2007年1月14日から3月25日の会期で、高知県立文学館において、特別企画「倉橋由美子 人と文学」展が開催されている。図書館から、1960年の「明治大学新聞」など、約70点を提供した。特別功労賞の表彰状とメ

¹⁶ 初版は文藝春秋新社、1960。「文春文庫」、1975。「新潮文庫」、1978。「講談社文芸文庫」、2002、など。

¹⁷ 初版は講談社、1970。「講談社文庫」(上・下2冊)、1973。

¹⁸ 1998年に当時の後藤総一郎館長の発案ではじめたの公開講演会。学生に図書館に足を運んでもらい、書物に関心を持ってもらおうとの狙いから、書架の並ぶ館内の閲覧室を会場とするのが特色。一般にも開放している。第1回のゲストは、井上ひさし氏であった。昨年は第8回。

ダルも展示された。展覧会パネルや図録の解説に、明大展のパンフレットから多くの転載がされた。初日に、古屋さんによる記念講演会が催された。特別功労賞が、様々な関連企画を誘発し、高知展にも繋がったと話された。本学の校友課、父母会事務室の協力を得て、校友会と父母会の高知県支部に連絡し、卒業生や在学生の父母の皆さんにも案内をした。

2007年3月刊行の、文学部紀要「文芸研究」第97号は、倉橋さん特集する。ここにもパンフレットから、略年譜と著書解題が転載される。

展示に係る書誌・所蔵調査には、館長のご紹介で、田中絵美利さん（文学部兼任講師）、川島みどりさん（情報コミュニケーション学部兼任講師）、鈴木淳さん（大学院文学研究科）、朝岡浩史さん（当時、大学院文学研究科）の助力を得た。田中さん、川島さん、鈴木さんには、パンフレットに著書解題を執筆いただいた。田中さん、川島さんは現在も書誌調査を継続しており、引き続き、積田さんにも協力をいただいている。文献量は、既に十分に一冊をなすだけになっている。出版の見込みも立ちそうである。

図書館はこれからも、倉橋さん関係の資料を収集・保存し、学生さんに読んでもらうための努力を継続していきたいと考えている。倉橋さんは、冒頭の文章で、「一見むなしいこの冒険に唯一の生きるよろこびをみだします」と書かれた。「冒険」という響きには、わくわくと心躍らされるものがある。小説を書くことが「冒険」であるならば、読書も「冒険」である。そして図書館もまた「冒険」の場でありたい。

準備期間から今日に至るまで、ご遺族をはじめ、学内外からたくさんのご支援ご協力をいただいた。式典に倉橋さんの同級生半田武一さん¹⁹が出席して下さった。明大オリジナル日本酒「おゝ明治」の発売元半田酒店のご主人である。ポスター、チラシ、展示パンフレットの編集・印刷は、(株)サンヨー（大橋篤さん）をお願いした。限られた時間の中で、当方の原稿ミスもカバーしていただいて満足するものに仕上げてくれた。関係の方々、改めて心より感謝申し上げる次第である。

¹⁹ 半田さんは、自らも小説を書いておられ、2006年6月に短編集『酒のある風景』（新風舎文庫）を上梓された。